第六部会

信徒が教えを担う条件

— 日蓮宗不受不施派と入道 —

田 中 久 美 子

本発表の目的は、清僧（正式な僧侶）が不在となつて日蓮宗不受不施派において、一般の信徒であつた人々がどういった形で清僧の役割をはたすようになるのかを明らかにすることである。具体的には、「入道」という役割に注目し、千葉県A寺とその信徒を研究の対象とした。

信徒が寺に関わるようになる一つのきっかけとしては、講社長や婦人会などの役割がまわつてくることにある。これらの役割は年齢が高い順番に平等にまわることによって、信徒と寺とのつながりをつくりだし、信徒はその研修会においてお経のとなえ方や数珠の持ち方などの宗教的作法を身につけていく。そして、このような寺との関わりをもつて後に信徒の中から入道が選出されていく。

清僧が存在しないため、法会や葬儀などの儀礼は住職代務を中心に行われている。入道と法務係は区別されており、入道を数年経験した人の中から法務係に任命される人ができる。A寺の信徒で平成二〜一七年までに入道得度した人は（故人も含む）、四〇代一人、六〇代四人、七〇代五人、八〇代三人とな

っている。高齢者が多く、健康などを理由としてつとめられない人も出てくるため、近年、入道になれるのは七〇歳以下と定められた。A寺には現在、男性一三名と女性一名が入道として名前がある。

入道は三年に一度信徒の中から選出されるが、住職代務や主な役員が相談をして本山に申請し、本山で認められればその信徒は入道になることができる。そして、推薦される基準は主として次のようであつた。一、推薦される人の親や祖父母が入道であつたか。二、講社長、婦人会長、役員などの役割において、熱心はその役目をはたしたか。三、人柄が優れているか。四、地域のためにはたらいしたか。この選出基準は、戒名のつけ方とも重なってくる。不受不施派では、死後よい戒名がもらえるかどうかは、生前、寺につくしたかどうかで決まるのだという。

しかしながら、「入道になるには覚悟が必要だ」という。その理由は、入道得度したからといって、入道に対して特別な研修は行われず、本山との関係も希薄であるからである。その上、現在動いている寺に関わるようになるシステムであると、講社長になるのが五〇歳前後で、役員、入道になるのはそれよりも後であることから、どうしてもそれを担う世代が限定されやすく、上の世代からの宗教的な作法や考え方などの伝達が制限されてしまっている。ただし、七〇歳頃から寺につくしていくということとは、この地域の人々の、年をとってから寺に行くものだという感覚にはそつている。

そのため、入道得度した人たちは、本山に行つた際やA寺の

行事の時に、見よう見まねでお経や作法をおぼえていく。そして、法華経などに関する本を読んだり、本山の法務係がとなえているお経を録音したテープをきいたり、入道経験者が残した資料から自ら学んでいくことによつて、A寺を存続させている。また、そういった覚悟を引き受けることができる人々が選出されているともいえる。

天英院照姫と法華信仰

——『常泉寺文書』を中心に——

長倉信祐

一、問題の所在 『常泉寺文書』（『諸記録』第八部）は、主に天英院照姫（徳川六代将軍家宣正室）が猶子の大石寺二十五世日宥上人を支援し、大石寺三門建立や独礼席許可を始め向島常泉寺諸堂寄進など天英院の私的な法華信仰（大石寺信仰）を伺う史料類聚である。小稿では天英院が下関後、西山本門寺末上行寺から大石寺末常泉寺に転院した背景を検討を試みた。

二、天英院と西山本門寺の関係 大石寺四十八世日量上人は西山末上行寺日衆師の生母が天英院の乳母であった為、西山本門寺十八代日順師の代僧（護持僧）として江戸に供奉した後「子細有つて」（日宥伝）常泉寺七代に就任し、天英院も帰依したと説示している。大石寺五十二世日露上人は天英院が京都で既に大石寺信仰に浴したと示唆する。近年の先行研究では石

山と西山の化儀化法の差異や上総細草檀林の学僧を通じて常泉寺に転派した背景が推考されているが、本末制度の問題点や教化僧も未詳であった。そこで西山が寺社奉行へ宛てた正徳年間の『西山本門寺文書』を検討した所、日順師が家綱葬送の参列を辞退し、西山十九代日意師も綱吉葬送の参列を断っていた。当時独礼席寺院の將軍送葬欠礼は幕府に問題視され、徳川一門に興入した天英院も生家の菩提寺に面目を潰された形となり西山本門寺は信頼を失い、正徳二年の家宣薨去には招聘すら届かなくなつた。故に西山二十代日通師は過去の非礼を詫び墓参を嘆願したが黙殺され、正徳六年に二十一代日観師も参拝を願つたが叶わなかつた。西山日順師の対応を前後し大石寺を本寺と理解した天英院は貞享元年に日衆師と共に常泉寺へ転派したと考えられる。こうした推論の補足理由として常泉寺九代日義師が纏めた「開祖已来之由緒舊記」に家綱葬送の関連書状を確認した。『徳川実紀』と照合した結果、幕府は関八州独礼席寺院に参列を義務付けたが、当時独礼席の無い大石寺や常泉寺に招聘は届かないため、当文書は日衆師が持参した可能性が高い。四代将軍家綱は北山日優師の祈禱で生誕して以来、重須を外護し、西山の独礼席を許すなど興門派有縁の將軍だった。当時不受不施派の影響で幕府は日蓮宗を監視し悲田新受派は御禁制となり興門派への余派すら危ぶまれた。これを契機に近習が天英院に言上した結果、日衆師を通じて細草檀林や常泉寺との通用が深まり大石寺門流へ帰依したと考えられる。

三、日精上人の江戸表での指導的地位 天英院改宗の本源を尋ねる限り、常泉寺を大石寺末に導いた大石寺十七世日精上人